

## ワークショップ3

### アカデミック・ジャパニーズ

門倉 正美 (横浜国立大学) kadokura@ynu.ac.jp  
堀井 恵子 (武蔵野大学) krhorii@ybb.ne.jp  
曹 大峰 (北京外国語大学) cdfeng@163.net  
鄭 起永 (釜山外国語大学) gyjung724@yahoo.co.jp

#### 1. 本ワークショップのねらい

日本留学試験の「日本語」シラバスが提起した「アカデミック・ジャパニーズ」とは、いったいどのような日本語力なのか。4人のコーディネータからの問題提起と、「読解」問題作問例と授業例提示をふまえて、自由な発想で参加者とともに大いに議論し、この教育・研究領域に関する今後の探求の土台としたい。

#### 2. 時間配分・参加形式

前半1時間：4人のコーディネータからの問題提起と、それをめぐる議論

後半1時間：門倉による「読解」問題作問例と堀井による「アカデミック・ジャパニーズ」授業例を素材として、「アカデミック・ジャパニーズ」実践について話し合う。

参加形式： 出入り自由（オープン形式）

#### 3. 参加者への「お土産」

3-1 アカデミック・ジャパニーズに関する参考文献（簡単な紹介つき）・シラバス例

3-2 門倉・堀井等による科研中間報告書『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』注文書（送料実費）

#### 4. 各コーディネータからのメッセージ

4-1 アカデミック・ジャパニーズについて考えるために 門倉正美

「アカデミック・ジャパニーズ」という表現は、「日本留学試験」を導入する報告書が、日本留学試験の「日本語」科目の性格を、「アカデミック・ジャパニーズ（大学での学習・生活に必要な日本語力）を測る」としたことから発している。しかし、アカデミック・ジャパニーズの内容とシラバスを構築していくのは、日本留学試験の作問者よりも、当然のことだが、むしろ大学での日本語教育に携わっている教育研究者たちの責務であろう。

「大学での学習に必要な日本語力」の内実と、その教授法が探究されることは、ただ学部留学生に対して役立つのみでない。自立的な学習・知的探究を基礎づける日本語力を身につけることは、大学院留学生にとっても、さらには学部日本人学生にも、そして一市民にとっても必要なことであり、アカデミック・ジャパニーズ教育研究は、日本語教育者の教育領域・研究領域を量的に拡大させるだけでなく、質的に深化させていくことになる。

アカデミック・ジャパニーズというと、ともすると「専門科目を学ぶに必要な語彙・表現力の育成」に目が向きがちだが、筆者は、専門科目学習に分化する以前の「教養的な問題提起力・思考力・探究力・発信力」の育成こそが重要である、と考えている。

アカデミック・ジャパニーズという教育研究領域の探究のためには、日本語教育研究におけるこれまでの（それほど多くない）アカデミック・ジャパニーズ教育実践研究をふまえるとともに、次のような領域の教育実践とその研究から積極的に摂取していく知的な食欲が必要である。○近年の「日本事情」教育における「問題発見解決」型実践研究、○JSLのトピック型活動、○国語教育における同種の実践研究、○総合的学習の実践研究、○大学の教養教育における「知の技法」的教育実践研究、○英語圏における「知の技法」的教育実践研究（スタディ・スキル）、○アカデミック・ライティング、クリティカル・リーディング等の英語教育における対応領域、○クリティカル・シンキング、ロジカル・シンキング教育実践研究、○メディア・リテラシー教育実践研究、○イギリスにおける「市民教育」運動等——アカデミック・ジャパニーズの関連領域の沃野は広大である。

#### 4-2 アカデミック・ジャパニーズの捉え方と授業実践例 堀井恵子

21世紀を豊かに生きていく人間の育成を考えたとき、キーワードのひとつになるのは問題発見解決能力であろう。アカデミック・ジャパニーズを考えると、スキルも大切であるが、問題発見解決能力は最も重要なものであると考える。

大学で学ぶときに中心になるのは講義を聴き、レポートや論文を書き、自らの考えを発表し討論するとともに、こうしたプロセスを批判的・論理的に展開していくことである。そのためには、いかに問題を発見するか、いかに問題を考えていくか、いかに批判的に物事を捉えていくか、いかにそれを伝えていくかのトレーニングが重要である。しかし、これらの力の養成が今まであまり注目されてこなかったのではないだろうか。

一方、これらの作業をスムーズに進めるためには学習スキルが必要となる。講義を聴いたり、情報収集するためのスキミング・スキヤニング、スキルとしてのアカデミック・ライティング、プレゼンテーションスキルなどである。こうした前提のもとに、筆者が担当している学部新入生を対象にした日本語・日本事情のシラバス例は以下の通りである。

##### 1. 日本語2：スキルを中心に問題発見解決能力も養う

①実際の履修要覧、シラバス、学生手帳の読み取り⇒時間割作り②一度で覚えてもらえる自己紹介とは?③わかりにくい授業をあげ、なぜなのか対策を考える、先輩の工夫紹介④短い講義テープを聴きスキミング・スキヤニングのタスク練習。⑤ロールプレイ+図書館体験⑥実際に書いた文(日本人学生がコメントを入れたもの)をみなで考える⑦レポートの基本的なポイント紹介⑧試験の受け方：先輩のお知恵拝借⑨大学内の学生課・教務課・その他の場面における感じのいいコミュニケーションを考える(ロールプレイ)⑩スピーチコンテストにむけて：実際のコンテストを目標にたくさんの人に伝わる話とはなにかを考える⑪懇親会の企画 ⑫学園祭への参加 ⑬大学内で起こりうるトラブルについて考える(事前に書いた作文からの問題提起)など⑭いろいろな種類の本をキーワード(キーセンテンス)探しをしながら読む。最後に三行まとめ文を書く。

2. 日本事情：異学部・異学年の留学生や日本人学生の共習による問題発見解決を中心にスキルも養う ①タスクシート作業(問題発見)：VTRと資料→グループで話し合う(進行役)→結果発表→個人のまとめ提出：テーマ例：日本の大学生の生活、日本語はあいまいか、日本語ジェンダー、少子化、グローバル化、宗教等 ②グループ発表(問題発見解決)

様々なテーマに気づき、それについて調べ、考え、他へ伝え、そこでのフィードバックでさらに考え（プレゼンテーション口頭・文書力）、できるだけ広く多く他者との接点を作る：相互コメントを書く（批判力）最終レポート

#### 4-3 中国の日本語教育におけるアカデミック・ジャパニーズ 曹大峰

##### 1. 中国の日本語教育

中国の日本語教育は今、英語に次ぐ第二の外国語として高等教育・初中等教育・民間教育（学校教育以外）にわたって広く行われている。その特徴を、3点に絞って示す。

①教育の層から見れば、韓国やオーストラリアに比べて高等教育における日本語教育の比重が大きく発展が速い。②日本留学のための予備教育は早くから開始・継続し、日本留学を目的とする日本語学習者の数が年々増え続け、日本語教育の対応を求められて各種の留学予備教育も近年急増している。③教育理念や教授法では、コミュニケーション能力や文化社会能力といった総合的運用能力及び自律的学習能力の養成が唱えられはじめたにもかかわらず、依然として文法や語彙などの基礎知識、聞く・話す・読む・書く・訳すなどの基本技能、教師の主導的役割を重んじている。

アカデミック・ジャパニーズを「学術日本語」と理解すれば、上記①でふれた中国の大学における日本語教育とも関連し、人材養成の目標は学術研究型か知識応用型か複合型かの議論や、タスク型やゼミ式の授業を開設するなど最近の教育改革の傾向と繋がる。

またアカデミック・ジャパニーズを「日本の大学での勉学や生活に対応できる日本語力」という特定の意味でとらえれば、上記②と関連する中国における日本留学のための日本語教育の形態と内容を対照的に検討し改善することになるが、ただし、上記③の中国の伝統的理念と教育特徴と関連してそのプラス又はマイナス的要素を考慮すべきであろう。

中国では最近、「日本留学試験」への関心がますます高まっているが、アカデミック・ジャパニーズの内実については、学習者はもとより、日本語教師たちでもほとんど知らないというのが現状である。

##### 2. 私のアカデミック・ジャパニーズ学習・教育

大学の日本語教師になってから、北京日本語研修センターで初めて日本からの派遣教授の授業を受け、レポートや小論文、ゼミや研究会など学習・研究活動を経験したことが、その後の日本留学と教師成長に大変役立った。現在は中日共同で運営と教育を行う北京日本学術センターで大学院の日本語学専攻と在職日本語教師向けの日本語教育学修士課程で教えているが、これまでの経験を生かして、ゼミ式の授業や留学指導もしている。特に自律的学習や創造的学習、認知分析やコミュニケーションの能力向上を導くような指導方法を模索している。そのようなアカデミック・ジャパニーズ的教育の経験から中国の特徴と問題を反省し、中国の日本語教育者の角度から「日本留学試験」の長短を検討し、日本におけるアカデミック・ジャパニーズ教育から摂取すべき要素について考えていきたい。

#### 4-4 韓国の日本語教育におけるアカデミック・ジャパニーズ 鄭起永

##### 1. 韓国の日本語教育

韓国の日本語教育は、依然として世界最大の日本語学習者を擁しているが、以下最近のいくつかの変化を3点にまとめて示す。

第一に、90年代の急激な学習者数と機関数の増加に比べ、2000年以降最近までその数は伸び悩んでいると言えるだろう。特に民間の日本語学校（主な学習者は社会人または大学生）の場合学習者が減り、経営上の打撃を受けていると言われている。民間の学習者数の低下の理由としては、90年代の日本語ブームによる日本語学習者の過剰供給、日本の長年の景気沈滞、中国語の浮上などの原因があげられる。

第二には、民間の日本語教育が停滞しているのに比べ、公教育においては、教育機関の拡大及び学習者の低年齢化によって日本語教育の底辺が拡大しつつあることである。2002年から中学における日本語教育の実施により、日本語を選択する中学生が増えており、また少数ではあるが、大都市を中心に小学校などでも日本語教育が始められている。

第三は、構造重視言語教育からコミュニケーション能力・認知・文化・情意重視の言語教育に教授法が移動していることである。特に、1998年から2004年まで順次に行われた日本文化の完全開放により、日本のドラマ・アニメーション・映画・歌・ゲームなどの日本語教育への導入が試みられている。また、異文化交流とコンピュータの日本語教育への導入のケースも増えている。

## 2. 韓国における日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ教育の動き

韓国における日本留学試験は第一回目の2002年度から行われているが、その受験者数は予想以上に伸び悩んでいる（受験者数：2002年第1回340名・第2回415名、2003年度第1回527名・第2回482名、2004年度第1回581名）。その理由は、日本留学試験が韓国の日本語教育界において十分に知られておらず、既存の日本語試験（日本語能力試験・JPT・NPT・日検・JTRA）に比べ、その認知度が低いためであると思われる。つまり、実際に日本の大学へ留学する学生のみが受験しているとするのが妥当であろう。

「アカデミック・ジャパニーズ」という用語自体まだ、韓国の日本語教育界には十分に知れ渡っておらず、アカデミック・ジャパニーズ教育の動きについての具体的事例はまだほとんど見られないと言えよう。しかし、アカデミック・ジャパニーズを「学術日本語」「日本の大学での勉学や生活に対応できる日本語力」と定義するのであれば、何らかの形で韓国の日本語教育（大学及び大学院の授業）でも行われていると思われる。ただ、これから大学を受験する高校生または卒業生の場合、そのアカデミック・ジャパニーズの範囲をどこまでと設定するかは課題であろう。さらに、最近の韓国の日本語教育界で強調している学習者への日本文化の理解とコミュニケーション能力養成教育は、生活レベルの日本語教育で行われており、学習者の読み書き能力やアカデミック・ジャパニーズ教育の不足を考えれば今後その必要性が台頭するものと予想される。

## 3. 私のアカデミック・ジャパニーズ教育

私の日本語学習を振り返ってみれば、韓国の大学で日本語を学習し、大学院で日本へ留学することになるのだが、日本の大学で必要な日本語力は渡日後ほとんど試行錯誤で習得したように思われる。その意味でこれを体系的に日本語教育に取り入れることは大変有意義であろう。現在の私の授業におけるアカデミック・ジャパニーズ教育の要素を強いて言えば、「インターネット時事日本語」という授業で多くの関連サイトを速読した後要約させる訓練、また目標とした資料を早く探す訓練などを挙げることができるだろう。それ以外には、学部の「日本語教育入門」や大学院の授業における学術用語を調べる指導や調査発表の授業を通してアカデミック・ジャパニーズ教育を試みている。